

システマティックカウセリング ——モデルとしての特徴と制限——

Systematic Counseling
—Merits and Limitations as a Counseling Model—

小山 聡子

1. はじめに

スチュワートらの開発したシステマティックカウセリングは、カウセリング理論と実践を結びつけるためのモデルであり、カウンセラーやサイコセラピスト、ソーシャルワーカーなど対人援助の専門職者に対しカウセリング過程の各局面で何を行っていくかについて詳細に知らせるための枠組みである。ソーシャルワークの実践アプローチが林立する中にあって、今まであまり紹介されてこなかったのは、それがカウセリングのモデル(註1)と銘打っているからではあるが、システム理論の応用によるフローチャートの使用をはじめとして、「教育・訓練」や「ワーカー自身の評価」という点で参考となる要素を含んでいる。

本論においては、このカウセリングモデルを取り上げる理由に触れ、その内容を理論的背景も含めて紹介すると共に、適用事例の一つを検討する事によりソーシャルワーカーの立場からその特長と制限につき考察する。

2. リハビリテーションカウセリングと リハビリテーションソーシャルワーク

ケースワークとカウセリングの違いはしばしば論じられるところである。重なった円で示される解釈が一般的であり、それによればカウセリングは主に個人内変容を、そしてケースワークは環境調整を含む個人間の問題も扱うとされる。ソーシャルワークがその歴史において種々の活動を寄せ集めたものから出発したため、固有の理論を持

たず、周辺領域から様々に借用して進んで来た経緯は周知である(奥田、91)。カウセリングはソーシャルワークにとって大きな役割の一つを担ってきた。しかし、近年はソーシャルワークの価値に照らして必要な技法を再編成しなければならないとも言われる(奥田 参照)。

システマティックカウセリングはアメリカ、ミシガン州立大学におけるリハビリテーションカウセリングの大学院教育の中で教えられる一種のケースマネジメントモデルである。アメリカにおけるリハビリテーションカウンセラーは、障害を持った個人が職業的にまた、生活上リハビリテートする事を援助する専門職である。日本では職業リハビリテーションを担う職業カウンセラーがその背景をなす専門分野と認識しているが(松為、8)、内容的にみても、歴史を振り返っても広く障害者福祉にたずさわるソーシャルワーカーにとって類似の規範を持っていると見てよい。

ライトによれば、もともとリハビリテーションカウンセラーは関連の職種から採用されていた。医学・ソーシャルワーク・職業教育・特殊教育・教育案内・心理学・人事管理・労働経済・作業及び理学療法・看護教育そして社会学など。アメリカ以外の国ではリハビリテーションを追求する専門職としてはソーシャルワークを採用するのが一般的であるという指摘もしている(Wright、20)。リハビリテーションカウセリングの発展初期においてはソーシャルワークこそ個人と地域社会の状況の両方に焦点を当てるという意味で、リハビリテーションの役割モデルにするべきと考える人

もいた。しかし、大勢は「職業」にスポットを当て、職業案内の方法に従っていった (Wright, 46)。つまり、アメリカにおけるリハビリテーションカウンセリングは障害者と職業を結びつけるという目的のもとに様々な周辺理論を借用しながら発展し、一定の時期にソーシャルワークと職名を分けていったといえる。日本において主に身体障害者を対象とするリハビリテーションソーシャルワーク (RSW) が専門分化の一分野として研究されているが、職業リハビリテーションカウンセラーにおいて指摘されているリハビリテーションカウンセリングと共通の基盤を RSW も持つと考えてよい。

つまり、アメリカのリハビリテーションカウンセリングには個人内変容という狭い意味のカウンセリングのほかにケースマネジメントや評価などが含まれており、特に RSW とは深い関係のある分野の一つである。その中で教育・訓練されるシステムティックカウンセリングを取り上げるのは、こうした理由からである。

3. システムティックカウンセリング

システムティックカウンセリングの定義付けは次のようである。「システムティックカウンセリングとは、カウンセリング過程における様々な局面が明確に位置づけられており、そしてクライアントの関心事 (concern) を効率的かつ効果的に解決するためにそれら一つ一つの局面が一続きの全体として統合されているようなアプローチである」 (Stewart et al, 50)。そしてその科学的基盤を見ると、理論と実践のベースには学習理論を採用し、組織的フレームワークにはシステム分析を、そしてカウンセリング遂行の方法と材料には教育工学 (educational technology) を使っている。システムティックカウンセリングを他のカウンセリングと区別する特徴は次のようである。

- 1) カウンセラーとクライアント両者がそのカウンセリングの目標に合意し、その達成に向かって進むということ。
- 2) そしてその目標は識別できる特定の行動 (observable behavior) として明示されるべきこと。
- 3) カウンセラーはクライアントが目標に達することを目指し、特定の学習経験 (learning experience) を提示し、指導してゆく。
- 4) 定義付けに見るような流れは大切であるが、時によって柔軟に対応する。
- 5) カウンセリングを「～する新しい方法を学ぶ」ための学習経験 (learning experience) と見なしており、それを通じて学んだ個別の問題解決方法をさらに一般的な場面に適応できるようになることを目指している。
- 6) カウンセラーはビデオや見学、ロールプレイといった様々な資源を活用してゆく。
- 7) カウンセラー、クライアント両者にとってフォローアップと評価が重要である。
- 8) システムティックカウンセリングは自己修正機能を持っている。(Stewart et al, 49~50)

定義付け及びこれらの特徴には、上記三つの科学的基盤が投影されているのがわかる。システム理論は、第二次世界大戦以降様々な科学に新たな概念的枠組みをもたらしたといわれる。しかし、カウンセリングのような応用科学にはあまり知られてこなかった。システムの定義付けには様々なものが、それらに大体共通するのは、第一に、システムは常に「全体」であること、第二に、その「全体」は常に「部分」からなっていること、第三に、システムは目的を持ち、その遂行のために各部分の間に一定の秩序があるということである。

それまでカウンセリングにあまり取り入れられてこなかったシステムアプローチを取り入れようとしたのは、新たに求めるカウンセリングモデル

の確立に有効であったからに他ならない。彼らが求めたモデルとは、カウンセリングを効果的に学ぶための「地図」となり、教育・実践のどちらにも役立つものであり、様々なタイプのクライアントやその問題に対応でき、またカウンセリング結果をより客観的に評価できるものであった。

学習理論の応用に関しては、どんなに抽象的で、人間らしい概念（例：愛、希望、自己実現、自立など）も、それを述べる各個人にとってそれぞれ別の具体的意味を持つはずであると考えたことに始まる。上記8項目の2)、3)、5)にはこの学習理論の影響が強く現れているのがわかる。

3番目の基盤「教育工学」の応用は上記では6)に現れているように、単に1対1の対話を通じてカウンセリングを行うのみならず、学習理論が掲げるような様々な教育的技法を駆使してゆくことの有効性を認めたためである。

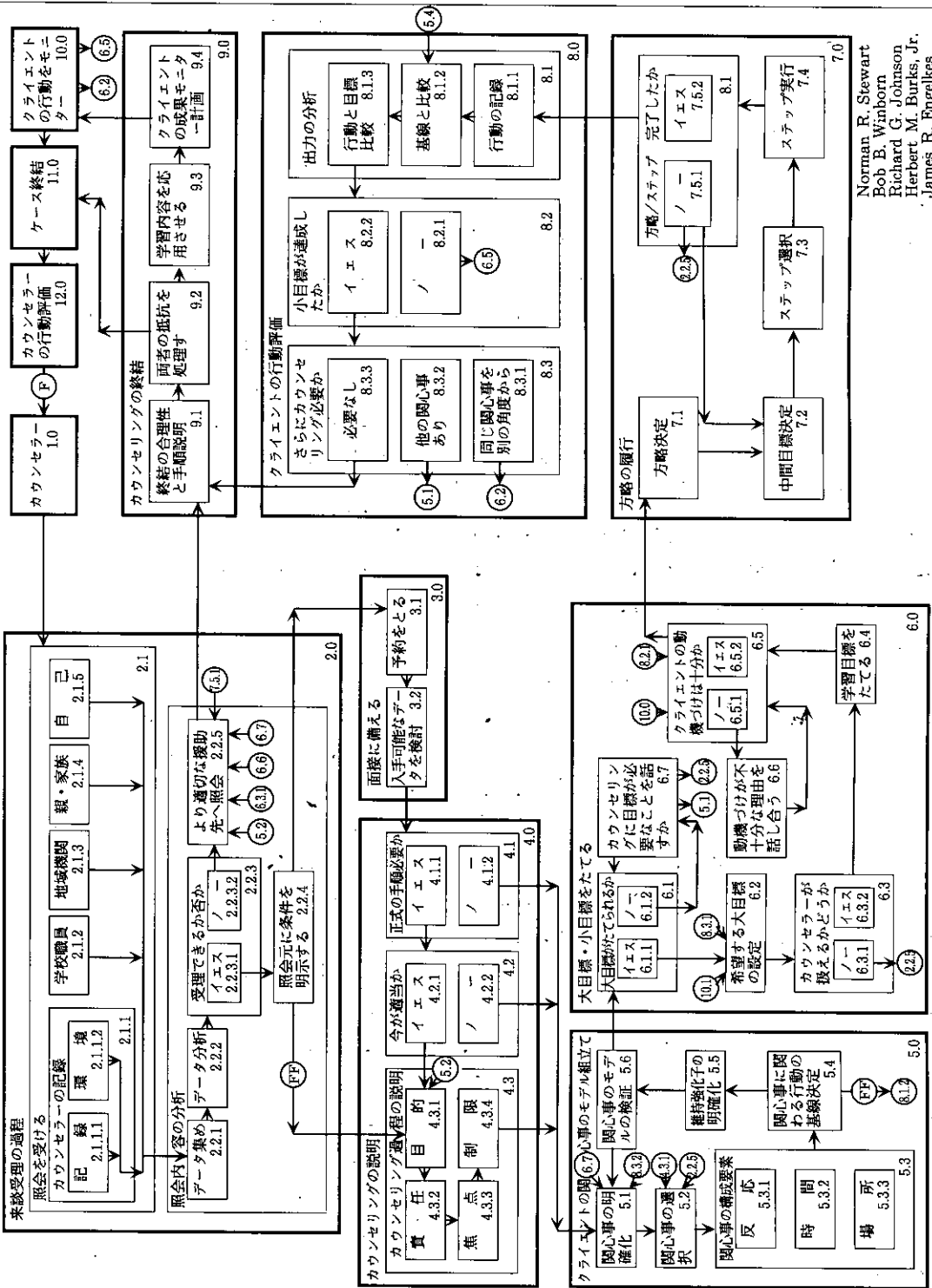
ここで12のサブシステムからなるフローチャートを詳しく見てゆくことにする。(図参照)

フローチャートは構成要素を全部あげるため、1.0がカウンセラーで始まる。サブシステムは1.0から12.0であるが、その中でレベルが細分化するに従ってコード番号が1.0、2.1、4.3.1等とつけられている。

1.0はカウンセラーで、カウンセラーは専門知識と技能を持つのみならず、基本的な態度と倫理観を備えるべきとされる。システムティックカウンセリングのテキストでは、カウンセラーの持つべき基本的態度（クライアントとの関係を促進する態度）について詳述している。2.0は「来談処理」である。自ら来ることも含め様々な場所から送致されるクライアントに関し、カウンセラーはデータを集め、受け入れの可否につき判断する。適当なら次へ進み、不適当な場合はより適切なサービスを紹介しなければならない。ここでは常にカウンセラーもしくはその所属する機関の守備範囲

ないしは力量を冷静に見つめるわけで、抱え込まない姿勢が打ち出されている。3.0は「面接の準備」で中身は面接の予約とデータの見直しである。4.0は「カウンセリングについての説明」で、正式の説明が必要か、今必要か等の判断をした上で、カウンセリングの目的、カウンセラーの責任、カウンセリングの焦点、そして制限について説明する。カウンセリングの目的はその個人が関心事を解決するよう援助する事。責任はカウンセラーについてはクライアントの感じ考えていることを理解し、クライアントの決定事項の遂行を側面から援助する事である。クライアントの責任はカウンセラーに理解させることである。焦点とは解決すべき事項が数多くあったとしても一度に一つずつ焦点づけて解決するというもの、そして制限では特に守秘義務について触れ、唯一本人も含め、誰かの生命に危険があるときはそれが破られることを確認する。5.0は「クライアントの関心事のモデル組立」である。ここでは、クライアントの持つ様々な関心事 (concern) を明確にし、一つの事柄を選び出し、その構成要素を明らかにしてゆく。何が、いつ、どれくらいの頻度で、どこで、起きるか（例：無茶食いが、夜中、1週間に2回くらい、1時間ほど続く）を具体的に聞き、行動の基線 (baseline) をはっきりさせる。これは優れて行動理論の影響が見いだせる部分で、baselineとは後で成果を客観的に評価するための比較対象となるスタート時点での「行動」である。このサブシステムでは最後にクライアントの特定の行動を促進するもの、維持強化子 (reinforcer) を明らかにし、全体像の確認をする。6.0、7.0と並んでこのサブシステムはシステムティックカウンセリングの中でも山場である。相手の抱える事項をカウンセラーとクライアントが共通の理解に持ってゆくための詳細が語られるからである。6.0は、「大目標 (goal) と小目標 (objective) を決める」

システムティックカウンセリング (☒)



Norman R. Stewart
Bob B. Winborn
Richard G. Johnson
Herbert M. Burks, Jr.
James R. Engelkes

である。ここでは、カウンセラーとクライアントがこのカウンセリングの大目標を定めることについて話し合う。理想像的なものをまず大目標と定め、そこに向かう努力がカウンセラーの手におえるものかどうかを判断する。良いとなれば今回のカウンセリングでまずは達成を目指す小目標、いわば学習目標を決め、クライアントに達成の努力をする用意があるかどうかを確認する。7.0が通常カウンセリング過程においては最も多く時間を使うであろうサブシステムで、「方略の遂行」である。目標に到達するための方略(counseling strategy)を決定し、それに向かういくつかの中間目標をたて、すぐに取りかけられるステップを選択し、いくつかのステップを踏んだ上で方略の遂行如何につき判断する。このテキストにおいては実際の方略としてモデリングや、強化といった行動カウンセリングに用いられる技法の紹介がなされている。次に来る8.0は「クライアントの行動評価」である。ここではまずカウンセリングの出力(outcome)を評価する。行動記録を使って、基線や小目標との比較をし、目標が達成されたかどうか判断するわけである。達成された場合は、さらにカウンセリングを行う必要があるか否かを判断する。ここでの選択肢には、a. 必要がない場合、b. 別の関心事がある場合、c. 同じ関心事を別の角度から検討する必要がある場合が含まれる。評価が終われば、次は9.0「カウンセリングの終結」である。ここではカウンセリングが終わることの説明をし、それについてのカウンセラー、クライアント両者の抵抗を取り除き、新しく身につけた技術を他で応用するよう指導し、後指導の計画をたてる。これでほとんどカウンセリングの定期的面接は終了し、10.0は「クライアントの後指導」である。それも終われば11.0は「ケースの終了」、そして「カウンセラー自身の評価」となる。

上記フローチャートを進んでゆく際にシステム

理論との関係で忘れてはならないのは、リサイクリング(recycling)や「フィードバック(feedback)」といった概念である。どちらもカウンセリング結果をより安定した一貫性のあるものとするためのもので、リサイクリングはシステム内のあるステージでエラーが見つかった場合にそれ以前のステージに立ち戻ってやり直すことである。(例：一旦小目標と定めたことが目標にならないことが判明し、目標設定からやり直す。)また、フィードバックは、カウンセリング出力を評価した上で、システム内の何かを変更する事である。(例：方略遂行に技法の学習が必要と自覚したカウンセラーが研修会に参加する。)

4. 事例

頭の中にシステマティックカウンセリングのフローチャートを置きながら何例ものケースに接して来たが、個人内変容という観点から比較的成功したケースを通じて、その適用を説明したい。なお、本人のプライバシー保護のために障害名、年齢、性別、訓練科目等細部には触れないものとし、フローチャートの各サブシステムとの関連で来談内容の大筋のみ記述することとする。なお、登場する専門職者は、担当のワーカー(男性)、ワーカー(筆者)、精神科医、スポーツ専門職である。

本ケースは入所後2ヶ月程して心理的に不安定な状態となり面接が開始された。約2ヶ月の間に本人からの電話連絡も含めて20回やりとりがあり、両者で設定した課題を達成してケースを閉じている。一連の面接過程をサブシステムのコード番号に対応させて記述する。

まず、本人の担当ワーカーより面接の依頼あり、了解する。(2.0)

(1回目)

以前と比べて思考がうまくまとまらない、疲れたという訴え。ワーカー(筆者)よりカウンセリン

グの原則（目的、責任、焦点、制限）につき説明し、本人了解。（4.3）「思考のまとまらない状態」についてなるべく具体的に話を聞く。（5.1）職業訓練の科目を決定するに当たってテスト的に課せられた課題をうまくこなせなかったこと、当初目指した訓練科目が評価の結果だめになったことが語られる。方向転換する事に決めたが、釈然とせず、意欲がわからないとのこと。ワーカーからは何に悩んでいるかわからなくとも不思議ではないこと、そのために話を聞くのであること、そして上記頭で決めたこと（方向転換）と感情（釈然としない）のずれについて考えてみることを提案。（5.2）

（2回目）

新たな訓練科目に入れることになり、1回目の面接で出された疲労感と意欲の低下に関しては、やや楽な感じである。原因として前回出された頭で考えたことと感情の乖離は関係ない気がするとのこと。ワーカー（筆者）より、抽象的感情や感覚も一応「具体的な行動」に翻訳できるという考え方をとっていること、その具体的な行動に不都合があれば対処してゆきたいこと、とりあえずそれに関して何か希望があるかどうかにつき尋ねる。（（4.3.1）にリサイクリグ。）

カウンセリングの継続如何について話し合う中で本人の過ぎこし方につき語られる。（やるべきことを求める飢えたライオンと表現）とりあえず、漠然とした不安感、疲労感について考えて見ることにする。（5.1）

（3回目：面接予定外、本人から訪れる）

涙ぐんでワーカー（筆者）を訪れたため急きょ話を聞く。その日の午後、突然「金属バットで頭を殴られたようなショック感」が訪れ落ち込んだ。このように頻繁に状態の変わる自分についてゆけない。その日は頭に浮かぶことを何でも語ってもらう。状況整理の方策をいくつか提案するがどれ

もピンとこないとのこと。いずれにしても話していれば少しはましとも言う。

（4回目）

前回に引き続き状況をよりの確に表現する言葉を探して対話。「自分探しの旅」を時間をかけて行ってゆくことになる。（5.1）

（5回目：ワーカー宅に本人より電話）（註2）

寮で一人になり、思いを巡らしていたが混乱して仕方がないというせっぱ詰まった感じの連絡。話の中で、本人から精神科受診の話が出されたため、受診しつつ一方でカウンセリングを受ける方法もあることをはなす。病院探しのため、地元の主治医に本人から問い合わせ、後にワーカーからも本人の他覚症状についてその医師に連絡する事になる。

（医師への連絡）

主治医は、非常に葛藤が強く、自らの激しい部分と甘えの部分が折り合わず混乱しているのではとの意見。精神科受診というより一般的カウンセリングの対応で十分と考えるが、せっぱ詰まった様子はあり、高じて過換気症候群等のパニックとなるおそれはあるため、抗不安薬を投与してもらうことは有効であろうとのこと。

（担当ワーカーに連絡、精神科受診）

（6回目）

精神科でもらった薬について本人より説明あり。引き続き食事はあまりとる気にならず、睡眠も断続的。全体的によい方向に向いているとは思えないとのこと。職業訓練に意欲を燃やす本人、混乱して苦しんでいる本人等、様々な側面が見えることにつきワーカーよりコメントし、それらをまとめる作業が目標になるのかと尋ねる。本人からは「わからない」との答え。取り組むべき課題の焦点化のところに来ると常に「わからない」がでるため、ワーカーより本当にわからないのか、何かから逃げている（自分では気づかないとしても）

のかどうだろうと極力柔らかに投げかける。本人は考える様子だがそれ以上深めようとしない。とりえず焦っている状況をなだめる手段として自己暗示を勧めて終わる。

(この後担当ワーカーからスポーツを勧める働きかけがあり、別の専門職からスポーツ・レクリエーション指導を受ける。)

(7回目：ワーカー宅へ電話)

混乱状態について訴えあり。「いろいろな人に世話になってまだはっきりしない自分が情けない」と自分を責める様子なので、今の状態を病気にたとえて、検査や療養に長時間かかることもあると話すと少し明るくなる。

(翌日、担当ワーカーより面接)

寮における同室者と折り合いが悪く、部屋替えを希望していることがわかる。(5.0及び6.0関連) 続けて担当ワーカーは同室者にも面接し、本人の状況を別の角度からも確認。

本人に了解を得た上で、この間の状況を地元の家族に報告。同時に寮の部屋替え実施。(7.1～7.4関連)

(8回目)

この間の混乱状態がどうも同室者の件と関係あるらしいと思えてきたとのこと。特に男女交際に関する価値観の違いに苦しみ、自分を押さえて来た。ワーカー(筆者)よりそこまで気づけたことを支援する。(7.5関連)

本人はこうして何か「問題」が起きたとき、対処してゆく応用力を身に付けたいと話す。ワーカー(筆者)は一旦今回の関心事についてはカウンセリングの終了もあり得と考え、次回まとめとこれ以後の目標について話しあうことを約して終わる。(8.3.1関連)

(9回目)

この間の混乱状態について、同室者との一種のトラブルを、ただ自分自身を押さえることで解決し

ようとした結果と分析する。大目標につき問いかけると、自分を車に例えて「どんな道でも安全に走りたい」と述べる。小目標として、「自己主張できる人になる。」をあげる。その先の中間目標については次回までの宿題にして終わる。(6.2～6.4)

(10回目：面接予定外に本人が訪れる)

この間のことを心配した家族が上京する事につき相談。場合によっては地元連れ帰られると心配している。家族に対し、きまじめに反応しすぎる傾向を感じたので、軽く受け流す方法を話して少し明るくなる。

(11回目：ワーカー宅に本人より電話)

「もうだめだ」との涙声。同室者らに本人がワーカー(筆者)らに告げ口をしていると責められたとのこと。受容中心で話しているうちに持ち直す。

(12回目：ワーカー宅に本人より電話)

家族との面会で職業訓練を続けるという結論になったこと、寮の仲間に勇気を出して声をかけちゃんと返事がかえって来たとの報告。ワーカー(筆者)より大いに支援する。

(13回目：ワーカー宅に本人より電話)

前回とは打って変わって沈んだ声。同室者に話しかけようとする異様に緊張するとの訴えが続き、話しているうちに今晚一晩だけでも自室以外で休みたいとの懇願となる。同じ敷地内に居住している担当ワーカーに電話で対応を依頼する。

(14回目)

週に1度の面接の間に本人から電話を含めて4回語りかけがあったことを確認し、現状を整理してもらう。9回目に設定した小目標が曖昧になっている様子で、自分をどうしようもない奴と表現する事が多いことに触れ、その姿勢の中に変化への抵抗があるかもしれないという内容をやんわりと伝える。(6.5.1～6.6) 本当に問題となることを探ってゆく作業と自己主張訓練を平行して行ってゆく

ことを提案し、合意を得る。(6.5.2) 宿題として、最近他者からの働きかけの中で、意に反して合意してしまったことまたは断りきれなかったことの具体例を3つ程リストアップするよう伝える。(7.1)

(15回目)

リストアップされた具体例2例を材料に、実際にしたものとは別の反応方法についてロールプレイング。ロールプレイをはさんで目指す姿を話し合う。以前より、本人が整理されている印象を抱く。

(16回目)

別の出来事に基づくロールプレイを続ける。一つの方法をもとにむっとした気持ちを伝えるにはどうするか、もう少し他人から説明を受けるにはどうするか等角度を変えて練習。

(17回目)

本人の自己主張する力を巡って検討材料となる一つの出来事があり、それについて話し合う。ワーカー(筆者)よりコメントとして、一朝一夕に悩みが解決するものではないし、また、人に対する反応の仕方にはよい悪いでは決められない事柄も多いため、ロールプレイなどの方法を通じて多様な反応方法を学んでゆくのではないかと結ぶ。かなり様子が立ち直りを感じさせるため、次の面接は2週間後とする。

(18回目)

職業訓練の先生とのやりとりの中で失敗したと思う例について報告があり、話し合う。ワーカーは、この間の話の内容が職業訓練(=準職場)における先生(=上司に準ずる人)とのやりとりのことに移っており、面接を始めた頃から変化していることを指摘し、前進ととらえて本人に投げかける。

そろそろ目標に照らした成果の評価に入ってもよいとの合意を得たため、この間の面接の流れをザッと振り返る。評価の仕方を説明し、次回本人が自分でやってみるとの約束で終える。(7.5)

(19回目)

評価の試み。前半：初回から部屋替えまで。(1回目～8回目) 後半：自己主張に関する目標を立ててから職業訓練に打ち込めるようになるまで。(9回目～18回目)

【前半について】

はじめの状態：原因不明の精神的疲労感、意欲の低下、不眠、食欲不振が続いた。話し合いの中から理由として気づいたのは、1. 部屋の問題(同室者の男女交際の仕方への不満を抱きつつもどこまで自分を出してよいのかわからない) 2. 目指して来た職業訓練科目に入れず、訓練のめどがたたなかったこと。3. その他の小さなストレスである。

現在の状態：部屋替えがあり、別の職業訓練も決まり、疲労感や意欲の低下、不眠、食欲不振は収まった。また、時には自己主張しながら、他人と一緒に住んでゆくことができるということがわかった。職業的には将来何をを目指すかがわかってきた。自分がわからなくなってまで考え込むことがなくなり、友人やワーカーに相談できるようになった。

【後半について】

はじめの状態：ひたすら我慢してしまうことが多く、「どんな道でも安全に走る(自分を車に例えてのメタファー)」という目標に照らして、対人関係の技術に向上が必要であった。

現在の状態：ロールプレイを通じて、自己主張の方法(良い意味の攻撃性)をかいま見た。ただし、完全に身に付いた状態とはほど遠い。ヒントはつかんだ。(8.1)

ワーカーからは1. それまでの自分(ひたすら我慢してしまうことの多い存在)を否定するのではなく、持ち味として大切にすること。2. 職場の人間関係は自己主張の件とは別の次元で考えることも場合によっては必要と説明し、本人の前進を支援する(8.2)。カウンセリングで身につけた

ことを今後の生活で応用するよう話す。(9.3) 一応面接は終えることを提案すると(9.1)、近い将来寮を出てアパートを借りようか迷っている件が持ち出される。ワーカーから見て面接を打ち切ることへの抵抗である危惧も感じられたため、この件でさらに面接が必要かどうか考え1週間うちに答えを出すよう伝えて終わる。(9.2)。

(20回目)

一旦自分でがんばってみるとのこと。表情はさっぱりして明るい。(9.0終わり)

(その後も訓練を終えるまで入所は続いたため、ワーカー(筆者)より時折声をかけ、状況確認をした。(10.0))

5. 考察

本ケースでは、前半同室者とのトラブルがストレスの原因と気づくまでに、このモデルではあまり強調されていないチームアプローチが行われている。2回目で、一応関心事と両方で定めた事柄が焦点を当てるべき事項ではないことが判明し、4.3.1カウンセリングの目的説明にリサイクリングしている。この後8回目まで、サブシステムでいえば5.0の部分で時間を費やしている間に本人の側からの差し迫った電話があり、精神科受診やスポーツ指導がなされた。結局は筆者ではない担当のワーカーとの面接で同室者との件がはっきりするのである。部屋替えつまり環境の変更のみで本人の状況が改善すればこれ以上面接の必要がなかったわけであるが、これを発端として対人面の技術向上に関する希望が強く出されたため、9回目以降のカウンセリングとなった。よって、担当ワーカーの面接やそれに基づく部屋替えに一応サブシステムのコード番号を付したが、2人の専門職が同時にシステムを通過しているという意味で、このモデルの応用である。

9回目でカウンセリングの大目標や小目標をた

て、6.0というサブシステムを順調に経過している。しかし、続く10回目～13回目はほとんど連日の本人からのSOSであり、14回目で、まさに、6.5から6.6のリサイクリングが行われ、本人自身が変わるべき部分への自覚が促されている。ここは、ワーカー(筆者)のリードでとにかく自己主張訓練に取り組むことを提案し、15回目～17回目はその方略を遂行している。19回目では、前半と後半に分けてカウンセリングの成果につき評価に取り組んでおり、本モデルの形通り進んだ。

以上本ケースの過程で特に本モデルが生かされているのは次の点である。

- a. 1.0から始まるサブシステムの流れに沿って進めており、エラーが見つかった時にそれ以前のサブシステムに戻るリサイクリングを行っている。
- b. カウンセリング関係について再三説明し、本人の自発的参加を求めている。
- c. 関心事、いわゆる悩みを具体的行動に翻訳できるという考え方を伝えている。
- d. その具体的行動を扱うということを説明した上で、カウンセリング継続の判断を本人にゆだねている。
- e. 両方で合意できる大・小目標をたてている。
- f. 方略を選択し、遂行している。
- g. 期間を区切って成果につき評価している。
- h. 抵抗を処理してカウンセリングを終結している。

一方、このモデルの流れではカバーしきれないと考えられる部分は、環境改善に向けたチームアプローチ、また、そうした観点からの他職種へのリファーである。これは、対個人に焦点を絞ったカウンセリングモデルの限界であろう。入所の身体障害者施設においては、一人のクライアントに対していくつかの専門職が別の角度から接し、力を出し合ってゆくことが重要である。また、本ケー

スにおいて、5.0「関心事のモデル組立」のサブシステムでは、このモデルに掲げる程細かい内容すべては対話の中で確認しきれていない。このサブシステムは、抽象的な内容をもカウンセラー、クライアント両者の共通理解に高めることに大いに貢献するものである。日常、クライアントの述べた抽象的な発言をあまり深めることなくワーカーからコメントしたり、すぐに何らかのアドバイスに持ってゆくといったことが起こる。こうした場合にこの5.0は優れた方法論を提供するであろう。しかし、一般的にいて、関心事における本人の反応をこのサブシステムにあるほど細かく確認する事は困難であったり、また無意味なことも多い。来談内容によって適用に適するか否かが左右されるといえる。

総じてこのモデルは、あらゆるタイプのクライアントの様々な関心事内容に適用可能を目指したとうたっているものの、本ケースのように、援助を求めるという観点において十分な自発性を持ったクライアントが、対人面の技術に向上を望むといった場合に最も適用がしやすい。一方、パーソナリティーの深い部分の問題や、純粋に環境改善のみで解決する場合等は適用が難しいといえる。また、本ケースにおいて、特に本人から SOS 的な働きかけがあったときに功を奏しているのはプロセスを頭に置いた上でのワーカーの反応と言うよりは、とにかく暖かく受け止めようとするリレーションの部分ではないだろうか。ワーカーやカウンセラーがまず身につけなければならない基本的態度が問われるところである。

本モデルはカウンセリングの立場から、内山らが様々な理論をを折衷する方法論、いわば統合カウンセリングの代表的モデルと評価している（内山ら、146）。複雑で矛盾撞着した存在としての人間に適用するためには、いくつものカウンセリング理論を統合すべきであるというのが彼らの意見

である。このように、特に方略の選択や遂行の場面（7.0）で様々な理論が適用できるとも考えられるが、前に触れたように、関心事の明確化の方法が行動理論の影響を受けているため、そのままの姿で各理論の応用には進みづらい面も多いと考えられる。しかし、全体的に見て、このモデルの優れた点は、誰もがやっていることを細かく整理して、一目瞭然のフローチャートにまとめた点である。これによって、学ぶ者に対し教えやすく、実践に当たる者の行動を評価しやすいという特長を持つことになった。この「ワーカーの行動評価」という試みが、担当制をしく中で他人の仕事には口出しをしないといった雰囲気もある入所施設では難しい場合が多い。こうしたモデルの存在は、仕事の進展を客観的に整理するという意味で、ワーカー自身の構えをとることに役だつと思われる。また、身体障害者の入所施設における処遇モデルの一つとしては、比較的長期にわたる「担当ワーカー対入所者」という関係の中で、必要な課題をピックアップし、時間的にも区切りをつけたメリハリある対応を助けるものとしての意味もあげられるであろう。

このモデルに影響を与えているシステム理論と学習理論は、1970年代以降リハビリテーションカウンセリング全体にその成果が積極的に取り入れられるようになった科学である。（Parker et al、65）。一方、ソーシャルワークの世界にもこれらの理論は強く影響を与えており、ピンカスとミナハン、ゴールドスタイン、コンプトンとギャラウェイらがシステム理論を使った介入モデルを提唱している。また、学習理論に基礎を置く行動療法は1960年代に治療マーケットに登場し、心理療法など他の治療法の競争相手となった（黒川、162）。カウンセリングも、またケースワークを含むソーシャルワークも隣接する科学として、同じ時代の流れのもとにあることが伺える。本論で取り上げ

たモデルを、フィードバックの概念を使って改良を加えながらソーシャルワークモデルの中に取り入れてゆくのか、または個人内変容に的を絞ったカウンセリングモデルとして必要に応じて使ってゆくのかは、はじめに述べたケースワークとカウンセリングの関係、またはソーシャルワークにおけるカウンセリングをどうとらえるかという認識にもよると考えられる。

6. 終わりに

他のケースワークアプローチ法にも共通する事であるが、先に述べたように、こうしたモデルは多少の環境調整があったとしても、対個人の観点が強く、ワーカーないしはカウンセラーとクライアントを含む機関や制度といった環境に対する働きかけがシステムの中に含まれていない。一現場にあって、対象となる人々に最大限の正の変容を保証してゆく一方で、自分をも含む福祉のシステム全体にどのように働きかけてゆくかが問われる。今、漠然とした「べき論」ではなく、一ワーカーが取り組むべき具体的行動を明示したモデルの構築は常に求められているといえよう。

- (註1) 「モデル」とは人間の存在やニーズをどのように把握し、解決するか概念枠を作成するための体系的思考形態またはその一般的記述であり(太田ら、82)、医学モデル、生活モデルといった広い概念である。そうした意味からはこのカウンセリングモデルはアプローチと呼ぶべきものであろうが、その著書の中でシュワートらがモデルと表現しているため、そのまま記した。
- (註2) 通常、クライアントにワーカーの自宅の電話を伝えることはしないのが原則である。本ケースの場合、夜間、入所者寮の当直者に緊急の訴えがあり、ワーカー宅に連絡を取りたい旨依頼があったため、例外的に伝えたものである。

文献目録

1. 黒川昭登 1993 『臨床ケースワークの基礎理論』 誠信書房
2. 松為信雄 1993 「リハビリテーションカウンセリングの専門性と従事者の役割」『職リハネットワーク』国立職業リハビリテーションセンター、20 (1993. 4), 8~13.
3. 奥田いさよ 1992 『社会福祉専門職性の研究』 川島書店
4. 太田義弘・佐藤豊道編著 『ソーシャルワーク 過程とその展開』 海声社
5. Parker, R. M. et al 1981 : Rehabilitation Counseling. Allyn and Bacon, Inc.
6. Sewart, N. R. et al 1978 : Systematic Counseling. Prentice-Hall, Inc.
7. 内山 喜久雄他 1986 『カウンセリング 今これから 理論・方法・技法を語る』 誠信書房
8. Wright G. N. 1980 : Total Rehabilitation. Little, Brown and Company Inc.